

## 保 育

# 気づく面白さが実感できる環境・援助を探る

## — 3歳児の実践を通して—

君 岡 智 央

### 1 はじめに

幼稚園に入園したばかりの3歳児は、家庭を離れ新しい環境に慣れていくことにじっくりと時間をかけていく。その中で、教師がすることを一緒にしたり、年上の友だちがしていることを真似たりしながらいろいろな遊びをやってみようとする。まだ、自分ではどのように遊んだらよいかかわからないため、教師や年上の友だちのしていることを真似ながら精一杯、環境にかかわって遊んでいるのである。3歳児が成長していくうえでは、大切な時期であると考え。そうした時期を経験しながら、徐々に自分でやりたいことを見つけ、やりたいことが思い切りやれる楽しさを味わえるようにしたいと考えた。

しかし、子どもたちがやりたいことをやれる楽しさを味わうだけでなく、やりたいことをやる中でいろいろなことに“気づく”という体験が必要ではないかと考えた。そうすることで子どもたちが気づいたことを遊びに取り入れようと、繰り返しやってみたり新しい方法を考える時に生かしたりするようになっていくと考えたからである。子どもにとっては、自分でやってみて気づいたことが“面白い”と感じるからこそ、気づきを遊びに取り入れようとすると考え。気づくことの必要性については、塩(2009)も「気づきは、自分の目的を実現するにはどうしたらよいかを考える際にいかされていくことになる」<sup>1)</sup>と述べている。気づいたことが3歳児の時点ですぐに生かされなくとも4歳児、5歳児になった時の遊びの中で生かされていくことも十分にあり得ると考えている。また、国立教育政策研究所は、「幼児期から児

童期への教育」の中で「幼児自らが注意を向け、ものや事の動きや変化を諸感覚で感じ受け止めることによって、発見や気づき、面白さや楽しさが生まれる」<sup>2)</sup>と述べ、諸感覚を働かせることによって気づきが生まれることを示している。3歳児の場合、興味あるもの一つ一つに対し、自分の目、耳、手などを使って確かめていこうとするので、諸感覚をしっかりと働かせながらいろいろなことに気づいていけるようにしたい。

以上のことを踏まえ、3歳児に自分のやりたいことをやりながら諸感覚を働かせ、いろいろなことに気づいていく面白さを感じられるようにしていきたい。そのためには、教師がどのように環境を構成し、援助をしていくべきなのか。今回の研究で探っていくことにする。

### 2 研究の方法

#### (1) 気づく面白さを実感している子どもの姿について

気づく面白さを実感している3歳児の子どもの姿を次のように考えている。

自分のやりたいことをやる中で、諸感覚を働かせて気づいたことを繰り返しやってみたり、友だちや教師に伝えたり、気づきをきっかけに考えたことをやってみたりしている

#### (2) 手立てについて

気づく面白さが実感できるように、5つの手立てを考えて実践に取り入れた。

・興味、関心をもったことに対して、思い切ってやってみようとしたり、繰り返し取り組んだり

できるような教師のかかわりと環境構成

- ・気づいたことに対し、子どもが面白さや不思議さを意識するような教師のかかわり
- ・友だちの考えや気づきにふれられるような教師のかかわりと環境構成
- ・気づきを促すような教師のかかわり
- ・子どもの好奇心を刺激するような環境構成

### 3 実践例（3歳児）

#### 実践例1「先生、できたよ」（4月）

3歳児の子どもたちが初めて園庭に出て、自分がしたい遊びができる日のこと。何人かの子どもたちが、4歳児の子どもたちが遊んでいる様子を面白そうにとじっと見ている。やってみたそうにしてはいても、やってみるところまでいかない。y女もその一人で、4歳児の子どもたちが水と泥を使ってゼリーのようにやわらかいケーキをつくる様子をしばらくじっと見ている。

ケーキをつくる年中児がいなくなると教師とy女だけになる。y女は近くにいる教師を呼び、「先生、一緒に食べよう」と話しかける。「おいしいね」と言いながら二人で一緒に食べている時、教師が「これって、y女ちゃんがつくったの？」と尋ねる。するとy女は「お姉ちゃんがつくったんよ」と言うので、教師が「お姉ちゃんがつくったの？これ食べちゃっていいの？」と再度、尋ねる。するとy女は「いいんよ」と話すので、「でも全部食べたら、お姉ちゃんがかわいそうかな・・・y女ちゃんはy女ちゃんで、自分でケーキをつくってみたら？」と話してみる。y女は「うん！」と大きく頷きながら、すぐに道具を持ち出し、道具置き場の近くでケーキづくりを始める。一生懸命作るy女の様子を隣で見守っていると違う遊びをしている子どもたちがやってきて教師を遊びに誘う。y女に「ちょっと他の友だちに呼ばれたから・・・すぐに帰ってくるね」と話し、y女のことが気になりながらも子どもたちに引っ張られてしまう。

しばらくして、y女が遠く離れた場所にいる教師のところにやってきて「先生、（ケーキ）できたよ」と泥がついた手を見せながら話す。どうやらy女は教師を探していたようである。「先生のいる場所がよくわかったね・・・そうか、先生を探していたんだね。」と教師が話すと「早く！早く！」と教師の手を引き、できたケーキのある場所に連れていこうとする。つくったケーキがある場所に着き、教師が一口食べて「おいしい！！これなら何個でも食べられる。嬉しいな」と応えようとy女は“ほっ”とした表情を浮かべ、その後、嬉しそうに一緒にケーキを食べ始める。

#### 【考察】

この実践でy女自身、ケーキづくりを通して何かに気づくことはなかった。しかし、あえてy女の事例を取り上げたのは、年中組の子どもたちがつくっている様子を見て自分も“やってみたい”“つくってみたい”と思ったy女に対し、教師が「自分でケーキをつくってみたら？」と一押ししたこととy女に自分でつくってみようという気持ちを抱かせることができたこと。それが“やりたい”と思ったことを思い切りやってみるのに大切な援助だと感じたからだ。

遊びの中で何かに気づく以前に、自分のやりたいことがやれる楽しさや嬉しさを子どもたちが味わえるようにすることが教師のかかわりとして非常に大切であると考え。特に入園後間もなく、ありのままの自分を出せるようにしていきたいと願う時期だからこそ自分のやりたいと思ったことを思い切ってやれる援助が必要であると考え。それによって、子どもが自主的に意欲的にやっていく中でいろいろなことに気づくことにつながっていくと考えている。

#### 実践例2「ひゅーっていった！」（5月）

子どもたちが砂場の砂と水で楽しそうに遊んでいる。気候的にも気持ちの良い日が続いていることもあり、特に水を使って遊ぶことが楽しいよう

である。子どもたちが砂場に水を溜めようと雨樋の向きを調節し、勢いよく水を流して遊んでいる。K男も水が流れる様子を見たり、流れる水に手をつけたりしている。

K男が小さな木の枝を持ってきて、水が流れる雨樋に這わせている。途中でK男が這わせていた枝を手から離す。すると枝は水の流れに沿って下っていく。その様子を見ていたK男は「あっ、すごい」と言いながら驚いている。途中、引っかかって止まってしまうこともあったが、なんとか砂場まで流れていく。教師が「面白そう。枝がどうなっていたの？」と尋ねてみる。K男は「ひゅーっていった！」と笑顔で答える。教師は「すごいね。流れていったね。面白いね」と共感する。K男は「うん！面白い！」と言って再度、やってみると前回と同じように流れていく様子を見て面白がっている。そして、別の木の枝を持ってくる。長さや太さは前の枝とあまり変わりはない。その枝も同様に水が流れる雨樋に這わせて手を放してみる。この枝も水の流れに沿って下っていく。教師は「また流れていったね」と言葉をかける。K男はニコニコと笑いながら面白がっている。

今度は、小さな葉っぱをK男が持ってくる。この葉っぱは、水が流れる雨樋の上に軽く落とすように置いてみる。葉っぱが流れる様子を見て「うおー」と声を上げ、興奮したように面白がっている。教師が「今度は何が流れたの？」と尋ねる。K男は「葉っぱ！葉っぱがひゅーってなったんよ」と再び笑顔で答える。教師は「葉っぱも流れるんだ。すごいなあ」と返す。K男と教師は笑顔で顔を見合わせる。その後もK男は葉っぱを何度も流して遊ぶのを楽しんでいる。

### 【考察】

K男は、水の流れの勢いによってもものが流れていくことに気づき始めた。そこで教師は、K男に枝がどのようになったのかを尋ね、気づきを言葉で表しながら共感する言葉をかけた。そのようにかかわっていくことで、子どもが自分で何気なくやってみて気づいたことに面白さを見出した

り、不思議さを感じたりするのではないかと考えたからだ。この教師のかかわりをきっかけに、K男は繰り返しやってみることで、新たなやり方で試していくことをしている。気づきに面白さや不思議さが伴わなければ、子どもは繰り返し試したり新たなやり方を試したりはしないだろう。教師は気づいたことに子どもが面白さや不思議さを意識できるように、共感したり認めたりする援助を心がける必要があると考える。

### 実践例3「また紫にしよう」（9月）

子どもたちが集まって友だちと石けん泡づくりが楽しめるよう、教師がテーブルを並べたコーナーを用意する。また、好きな色の泡がつけられるように、色をつけるお花紙の種類を増やしたり、ヨウシュヤマゴボウの実やアサガオの花びらなどの植物を用意したりしている。このコーナーで、H男が泡立て器を使って石けん泡をつくっている。H男は「先生、ほら、こんなのになってきた！」と言いながら嬉しそうに泡を混ぜ続けている。教師が「本当だ。上手にできているね！」と認める。H男は「あわあわがいっぱいできたら、アイスクリームになるんよ」と言いながらご機嫌である。a女が紫色のアサガオの花びらを使って色水をつくり、教師に見せに来る。「紫の花びらを入れたんよ。そしたら紫の水なんよ」と話すa女に対し、教師が共感し「すごい！」などと認めていく。隣でその様子を聞いていたH男が、a女が使った同じ色のアサガオの花びらを泡に入れてかき混ぜてみる。すると、うっすらと泡が紫色になっている。そのことに気づくと「見て！」と大声で言いながら、得意そうに教師のところに泡を見せに来る。教師が「おおっ、泡に色がついてるね！」と認めていくとH男が「ほら、紫」と言う。教師が「すごいなあ。どうやったらそんなのができるの？」と尋ねてみる。H男が「お花をいっぱい入れたんよ」と答える。教師が「へえー、どんな花なの？」と尋ねるとH男は箱に入ったアサガオの花びらを指さし、「これよ」と答える。「そっかあ、こ

の花びらを泡と混ぜたら色がついたんだ。すごく面白いね」と教師が再度認めていく。H男はうなずくと、また泡をかき混ぜ始め、近くにいる友だちに「ねえねえ、見て」「ほら」などと嬉しそうに見せていた。

しばらくしてH男は新しい石けん泡をつくり始める。アサガオの花びらの隣にあった緑色のお花紙を持ち出し、粉状の石けんや水と一緒に入れてかき混ぜてみる。すると泡がうっすらと緑色になる。H男が「あっ」と言う。「見て」と驚きながら教師に話しかけるH男。「新しい色の(泡)ができてる!」と教師が驚くとH男が「グリーンになった」と答える。「へえー、どうやって?」と尋ねてみる。「グリーンのお花紙、入れたんよ」と答える。教師は「グリーンのお花紙を入れてみたのかあ、それで、緑になったのかあ!本当に面白いなあ」と共感していく。H男がうなずくと、今度は黒色のお花紙を持ってきて緑色の泡の中に入れてかき混ぜる。緑色の泡がだんだんと黒色に変わっていく。「あっ!黒になった。先生!」と言いながら黒色に変わった泡を見せる。この時も教師が「あらっ!今度は黒になったの?泡の色が変わるんだ。面白いね」と共感する。するとH男は、ニコニコしながら「また紫にしよう」と言い出したので、教師は「やってみたらいいよ。どうやったらできるかな?」と返す。H男はお花紙の紫を取ってきて入れてみるが、泡は黒のままである。次に、最初に使った紫色のアサガオの花びらを持ってくるが、色は変わらない。更にいろいろな色のお花紙を選んできて、丸めて一緒に入れて混ぜてみるが紫には変わらない。困っているH男に「どう?紫になった?」と聞いてみる。「できん・・・」と言う。半ばあきらめかけているH男。教師は「どうやったらいいかなあ。先生も考えてみるよ。一緒に考えよ・・・」と答える。そこへ、先ほどのa女が教師のところに来て「どうしたん?」と話しかける。H男がなかなか言い出さないので、教師が「この泡を紫にしたいんだって」と答える。a女が「紫の花びらがあるよ」と教えるがH男は気に留めていないようだったの

で、「a女ちゃんが、紫の花びらがあるって」と教師が会話をつなぐ。H男は、「できんよ」と答える。教師が「a女ちゃんだったらどうする?」と聞いてみる。a女は「紫の色水になるヤマブドウ(ヨウシュヤマゴボウ)は?」と答える。H男が教師と共に水や泡に色をつける材料のあるところに行ってみる。H男がヨウシュヤマゴボウの実がついた房を取って、実を泡の中に入れてかき混ぜる。次第に泡は紫色に変わっていく。「あっ!紫になった」と言いながら、H男が嬉しそうに笑っている。教師が「どう?」と聞いてみる。H男は「ヤマブドウを入れたら紫になった!」と喜んでいる。教師は「ヨウシュヤマゴボウの実を入れたらよかったんだ。紫色になってよかったね」と色が紫になったH男の喜びに共感する。

#### 【考察】

H男はa女のようにやってみたことをきっかけに、泡に色がつくことや色が変わることに関心し、そこに面白さを感じている。そのようなするには、友だちのしていることにふれられる環境を構成することが必要であることがわかる。つまり、事例のように子どもたちが複数集まって遊びが楽しめるコーナーをつくることも、気づく面白さを実感するうえで必要な環境構成の一つであることがわかる。

また、a女が「どうしたの?」と話しかけた時、教師は当初、H男がa女と互いに思いや考えなどを出してやりとりをしていく必要があると考えた。H男に「紫にしたい」と思ったことがやれる喜びを味わえるようにしたり、あきらめずにやってみたりするきっかけになるのではないかと考えたからだ。そのため、a女と自分の思いをなかなか言い出せないH男との間を教師が会話をつないだり代弁したりしてやりとりができるようにしていった。そのようにしたことで、H男がa女のアドバイスをきっかけに再チャレンジしている。そして、a女が言うように実際にヨウシュヤマゴボウを使うことで、紫になることにH男が気づき、「紫にしたい」と思ったことがやれた喜びを味わ

えるようにすることができた。「あっ！紫になった」という声は、H男にとって、やりたいことがやれた喜びを表したり、ヨウシュヤマゴボウによって紫色に変化することに気づく喜びを実感したりした瞬間だと思っている。

実践例3では、子どもが友だちの考えや気づきにふれたことをきっかけに、実際に自分でやってみる中で気づきが生まれ、そこに面白さを感じていた。友だちの影響を受けられるようにすることも必要な援助であることを実感した。



図1 色が変わることに気づきながら、夢中になって石けん泡をつくる様子

#### 実践例4「さっきと違うよ」(11月)

空き箱、ヨーグルト容器、ペットボトルのキャップ、ドングリなど製作遊びができるように様々な素材がたくさん置いてあるコーナーから、I男がヨーグルトカップ2つと栗を持ち出し、マラカスを作り始める。完成するとI男は意気揚々と教師に見せに来る。そして、I男はニコニコしながら教師に、「(中に)何が入っているのでしょうか?」と聞く。教師は少し悩みながら「う〜ん・・・栗!」と答える。I男は「ピンポーン!」と正解であることを伝える。教師が「へえー、どんな音がするの?聞いてみたいな」と興味深く尋ねてみる。I男が「ほら」と言いながらマラカスを上下に振ってみせると「カタカタって音がする」と言う。教師はマラカスに耳を近づけ、音を聞きながら「本当だ。カタカタって音がするよ」と共感する。今度はマラカスを横に振る。すると上下に振った時とは違う音がする。マラカスの中身の栗とヨーグルトの容器が擦れるような音がする。I男が「あっ、

シャッシャッって音がする。先生、シャッシャッって音がするよ」と言いながらマラカスを横に振ってみせる。教師が「あれ!本当だ!シャッシャッって音だね。同じマラカスなのに違う音になるんだ」と驚くように答える。I男は嬉しそうに近くにいる友だちに「見て〜」と言いながらマラカスの音を鳴らし、「カタカタ」「シャカシャカ」と言っている。

しばらくするとI男はヨーグルトカップでつくったマラカスを牛乳パックに入れ、「(マラカスを)牛乳パックの中に入れたんよ。ほら、見て」と牛乳パックの口から中を教師に見せる。教師が「本当だ。どんなになるのかな?」と尋ねる。I男は反対の手に持っていたヨーグルトカップを牛乳パックの口にかぶせて振ってみる。これまでとは違って、低く重たいような音がする。教師が「どんな音がした?」と聞いてみる。I男は「さっきと違うよ。ゴトゴトって音がするよ」と言う。教師はこの時も「本当だ。ゴトゴトって音がするよ。すごいことにI男君は気づいていっているね。マラカスのいろんな音の鳴り方を教えてくれるよ」とこの時も驚くように応える。

翌日、I男は牛乳パックの中に栗を入れ、口に豆腐の容器をかぶせたマラカスとゼリーのカップを組み合わせ、中に小さなドングリを入れた二つの新しいマラカスを持って教師のところに見せに来る。「I男ね。二つもつくったんよ。ほら」と自慢気に言う。どうやら、まだつくったばかりで鳴らしていないようである。そして、教師の目の前で一つずつ思いっきり振ってみる。二つのマラカスの音を聞き、I男は「あれ〜?こっち(牛乳パックのマラカス)の方が音が大きくて、こっちは音が小さいよ」と音の違いをつぶやいている。教師が「どう?」と尋ねるとI男が音の大きさの違いを話す。実際に音を聞いた教師は「本当じゃ。音の大きさが違うね。いろんなマラカスで鳴り方も大きさも違うんじゃない!」と驚いたように返すとI男は「うん!そうよ」と得意そうに答える。



図2 マラカスづくりを楽しむ子どもたち



図3 I男がつくったマラカス

## 【考察】

事例4においては、I男が音に着目し、探究していく中で音の様々な違いに気づいている。特に印象的なのは、I男がマラカスの音から気づいたことを自ら教師や友だちに伝えようとする姿である。こうした姿から、I男が気づく面白さを実感していることがわかる。この事例における気づく面白さを実感したきっかけは、教師がマラカスを最初に見せに来た時点で「どんな音がするの？」と尋ねていったこと。そして、気づきを言葉で表せるように尋ねて共感していったことだろう。「どんな音がするの？」と尋ねていったことは、I男が音の鳴り方に着目するとともに、気づきを促すきっかけとなった。

気づくことに面白さを感じ始めると子どもは「こうしたらどうかな？」などと疑問を抱き、もっと試してみたいくなる。その時、自分なりにいろいろと試していくからこそ、新たな気づきが生まれてくると考える。そのためには、子どもの遊びにに応じて様々な素材が十分に用意してある環境を整えておくことも大事な援助の一つだろう。

## 実践例5「氷、つくろう！」(12月)

## ①「バリバリ、ザラザラ、冷たかったよ」

好きな遊びを終えて帰ってきた子どもたちが、「大きい組さんが氷をつくっているんだって」と教師に話しに来る。その後、クラス全体の場でも氷のつくり方やどうしてできるのかを教師と子どもたちとで話しているうちに、子どもたちから「氷、つくろう！」と声があがり、クラス全員で氷づくりをすることになる。各自いろいろな容器に水を入れたら、保育室前のプールの真ん中に出しておく。いつでも子どもたちの視界に入り、身近なところで氷にふれられるようにするためである。

翌日、見事に氷が水の表面を覆っている。登園した子どもたちがプールの方を見ながら「氷、できたかなあ？」と楽しんでいる。身支度を終えた子どもたちは急いで、水を入れた容器があるプールに行ってみる。子どもたちは自分たちがつくった氷ができていることがわかると、「(氷が)できてるよ！」と嬉しそうにしながら指で軽くふれている。氷ができて喜ぶ声が大きくなると、後から登園してきた子どもたちが「えっ、氷、できているの？」と言いながらプールに駆け寄る。教師が「入れ物から取り出してもいいし、思い切り触ってみてもいいよ」と伝える。子どもたちは氷を容器から取り出し、手で触ってみる。

k女は「k女のも氷ができてる！」と言いながら、触ってみて「あっ、触ったらバリバリ」と氷を触っての感触について話す。r女も「(k女に対し)r女のもほら、ザラザラしてる。s女ちゃんも触って！」と話す。s女が自分の氷を触ってみる。「つめたい！！」と大きな声をあげながら興奮している。s女は持っていた氷を手放し、教師に「先生、冷たかったよ。触ってみて」と手を出す。教師が手を触ってみると「本当だ。手が冷たいね。氷を触ると手が冷たくなるんだね」と返す。周りでは、S男がハンカチに包んだ氷を持ち、「ああ、ハンカチで(氷を)持っても手が冷たくなるー」と言いながら友だちに見せている。

子どもたちの手によって、取り出した氷が机の

上に置かれる。机は氷を出して広げて遊べるよう、教師が用意したものである。周りにいる子どもたちが「冷たい！冷たい！」と叫びながら手で広げている。



図4 指で氷に触れてみる子ども



図5 氷を机に広げながら感触を楽しむ様子

## ②「氷がなくなっていくよ！！」

氷を触った手を温める目的で、バケツに入った湯を子どもたちの近くに置いておく。それを見つけたS男は「これ（氷）を（バケツの湯に）入れてみよう」と自分が持っていた氷をバケツの中の湯に入れてみる。すると、氷が徐々に融けていく。しばらくしてS男が「氷がなくなっていくよ」と言いながら驚く。融けていく氷を見ながらs女が「なくなっていくよね」と話す。S男が教師に「先生、氷がなくなっていくよ」と伝えにくる。教師が「えっ、どうして融けるの？」と尋ねる。S男が考えているとs女が「（湯が）温かいと融けるから」と答える。そして、s女が「融け融けパーティーじゃね」と言うとS男も「融け融けパーティー！」と言いながら、更に氷を湯が入ったバケツの中に入れて、手でかき混ぜていく。少し時間を置き、かき混ぜ続けていると教師が「お湯と氷、触って気持ちいい？」と尋ねてみる。S男は「冷たいよ！」と答える。教師が「冷たい？

何で？中はお湯でしょ。温かいはずでしょ？」と再度尋ねる。S男は少し考えて「うーん、氷がいっぱい（湯の中に）入ったけえよ」と答える。教師が「氷がお湯を冷たくしたの？」と尋ねるとS男が「そう。氷が冷たいけえよ」と自信たっぷりに答える。

### 【考察】

3歳児でも氷が冷たいことは、氷が入ったお茶を飲むなど、口に入れることを通してわかっているはずである。しかし、思い切り手で触れてみて芯から氷の冷たさを感じるという経験は少ないだろう。実践例5では、子どもたちが興味をもった氷づくりを教師が取り上げ、実際に自分たちでつくって思い切り触れられるようにしたことで手が冷たくなってしまったり氷の表面の感触、湯の温かさによって融けるといった法則性に子どもたちが気づいた。教師が子どもの興味をそのままにせず、しっかりと取り上げていくということが大切になってくるということがわかる。

氷はすぐにできるわけではないので、つくった子どもたちにとっては、「（氷が）できているかな？」「できていたらいいな」と好奇心を抱かせるものがある。実践例5では、氷をつくった容器を登園してきた子どもたちの視界に入りやすい身近な場所に置くようにしている。身近な場所にあることで、子どもたちが抱いた好奇心が刺激され、自分からできたかどうかを確かめに行ったり、友だちの声を聞いて氷を見に行ったりしている。このように、子どもの好奇心を刺激するような環境を構成して“気づく”きっかけをつくっていくことが大切であることがわかった。また、その時期ならではの自然物が子どもの好奇心を刺激する素材となり、いろいろなことに気づくきっかけになるということがわかった。

## 4 おわりに

3歳児に遊びの中で気づく面白さが実感できるようにするため、5つの手立てを講じた結果、次

のことが明らかになった。

- ・興味、関心をもったことに対して、思い切ってやってみようとしたり、繰り返し取り組んだりできるような教師のかかわりと環境構成

自分のやりたいことがやれるように、「やってみてもいいよ」「自分でやってみたらどうかな？」などと意欲が湧くような言葉をかけることが大切であるということがわかった。実践例1では、y女一人で取り組んでいるが、子どもによって不安を抱いていれば、安心感がもてるように教師と一緒にやってみることが必要である。

自分なりにいろいろと試していけるよう、遊びに応じて様々な素材を十分用意し、子どもが自由に選んで使えるようにしておくことが大切であるということがわかった。

子どもの興味をそのままにしておくのではなく、すぐに取り上げていろいろとやってみられるようにすることが大切であるということがわかった。

- ・気づいたことに対し、子どもが面白さや不思議さを意識するような教師のかかわり

子どもが何かに気づいている姿があれば、様子を見ながら気づいたことについて尋ねていき、気づきを言葉で表しながら共感したり認めたりすることが大切であるということがわかった。

- ・友だちの考えや気づきにふれられるような教師のかかわりと環境構成

子どもたちが複数集まって遊びが楽しめるコーナーを意図的につくっていくことが大切であるということがわかった。

友だちと互いに思いや考え、気づきを出してやりとりできるようにすることが大切であることがわかった。しかし、3歳児の場合、友だちとのやりとりがうまくいかないことが多いので、教師が会話をつないだり、代弁したりすることが大切である。

- ・気づきを促すような教師のかかわり

子どもが着目してない部分に着目できるようにしたり、興味をもったりするような言葉をかけることが大切であるということがわかった。しかし、子どもが無理なく目を向けられるようにかかわる

ことが大切である。

- ・子どもの好奇心を刺激するような環境構成

子どもが興味をもっているものを子どもたちの身近な場所に配置し、いつでも観たり触ったりなどができるようにすることが大切であるということがわかった。

それぞれの季節ならではの自然物を取り入れることが子どもの好奇心を刺激し、いろいろなことに気づくきっかけになるということがわかった。

教師が講じた手立てによって、3歳児でも自分で直接、体験することで様々なことに気づいて繰り返しやってみたり、気づいたことをきっかけに考えたことをやってみたりする姿が見られた。また、気づいたことを教師や友だちに自ら伝えていこうとする姿も見られた。こうした姿を目にししながら、子どもたちがまさに気づく面白さを実感していると感じた。

大切なのは、子どもたちが主体となって“やりたいことをやりながら”ということで、教師が知識を教え込み、ただ知識を増やしていくことを目的とするのではないということである。子どもの主体的な活動の中で気づくということを教師が意識していくことである。このことを意識して環境構成や援助を行うことによって、子どもたちが気づくことに面白さを感じ、自分たちの遊びに気づきを取り入れていくようになるのである。

改めて“気づく”体験をしていくことの必要性を感じながら、今回、明らかになったことが今後の3歳児における保育で生かされるものと考えている。これからも子どもたちが自分のやりたいことを思い切りやりながら、いろいろなことに気づく面白さを実感できるようにしていきたい。

#### <引用文献>

- 1) 塩美佐枝：「保育内容環境」小田豊・湯川秀樹編，p. 48，2009，北大路書房。
- 2) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター：「幼児期から児童期への教育」，p. 23，2005，ひかりのくに株式会社。